

事はの意。皇神は、すめらがみ、神を尊びていふ語。すめ(すべ)は接頭語で、天皇又は天皇の御上に係る物事の名に添へて敬意を表するに用ひる語である。見はるかしますは、遙かに天上から見渡されますの意。「はる」とは晴、霽は遙等の意味である。「はる」の語は更に「はるく」とか「はるかす」とかに分化してゐるが、この「はるかす」といふ語は、「はるく」と云ふ語に「す」といふ動詞を結合して「はるかす」といふ他動詞を造つたのである。四方の國は、全國土はの意。天の壁立つ極みは、天空が青々と壁のやうに四方にそばだつて見える限りの意。國の退立つ限りは、國土の遠く離れた彼方の果をいふ。この國は前の天に對して用ひたので地の意味である。「そき立つ」の「そく」には、離、放、除、去、削などの義がある。又、「そく」は「さ

く」ともなつて、避、離、放、裂などの義に用ひられる。「退立つ」は前の句の「壁立つ」と對句をなしてゐるので立つといふ語は、接尾語で、動詞の連用形に添へて、その意を強める時に用ひられるのである。「天の壁立つ極み、國の退立つ限り」の一對句は、天涯地際。天の續く限り、地の廣がる限りの意味である。青雲のたなびく極みは、次の「白雲の墜り坐向伏す限り」と對句。青雲といふのは、青空に浮んでゐる薄雲で、空の青色が透いて青白く見えるから、厚いムク／＼とした白雲に對比して青雲と呼んだのであらう。その薄い青雲が天空遠くたなびいてゐる極みといふので、先きの「天の壁立つ極み」と同意味のことを繰返して別言したのである。白雲の墜り坐向伏す限りは、白雲が遠い地平線のところに垂れ下つてゐる果といふ意。かくの如く同様の語

を用ひてゐるのが祝詞の特徴である。青海原には棹柁干さずは、青々とした大海にあつては、棹や柁の乾く暇もなく、漕ぎに漕いで、もうこれ以上は往けないといふ果までといふ意。「棹柁干さず」とは船が絶間なく通ふ意。又船路の行き至る極みをもいふ。舟の艫の至り留る極みは下の句「馬の爪の至り留る限り」と對句をなしてゐる。舟の艫の至りとどまる果をいふ。この船は、貢物をのせてゐる船である。大海原に舟滿ちつづけては、下の句「長路間なく立ちつづけて」と對句をなしてゐる。大海原には貢物を運搬する諸船が一面に漕ぎ續いてゐるといふ意。陸より往く道は、前の「青海原は棹柁干さず」に對しての句であつて、これより陸路を経て、貢物を運搬する盛況を述べるのである。荷の緒縛ひ堅めては、荷前即ち貢物を納れた箱の緒を堅く結ぶといふ

意。荷の緒を結び堅めたのは、長い路を行くための用意である。履みさくみては踏み分け進むことをいふ。馬の爪の至り留る限りは「船の艫の至り留る極み」に對する句で、「貢物をつけた馬が至り留る地の限り」長道間なく立ちつづけては、國の果て／＼から朝廷まで長の道中に馬が續いて來るとの意。前の「大海原に舟滿ちつづけて」の句に對するのである。狭き國は廣く、峻しき國は平らけくは、耕地の狭い國は耕地を廣くし、峻しい國は平らかに改修すること。遠き國は八十綱うちかけて引寄する事の如くは、遠方の外國は八十綱をうちかけて我が國の方へ引寄せる國引の事のやうに我が朝廷に貢物を奉つて朝貢させることをいふ。八十綱云々は出雲風土記に在る。

注 意

本課後段に於て重要な部分をなして居る祝詞は本課の説明にて大體、要は盡くしてゐる。今茲に祝詞の詳解をして、本課教授の参考に供して置く。

- 一、祝詞の本質と目的。祝詞の本質は上代民族の言靈信仰に基いて生じた原始的宗教に使用せられた一種の宗教文學である。その目的とするところは祭祀の場合、これを唱へて神徳を稱へ且つ祈願を述べるにあつた。
- 二、祝詞の起原。これは天岩戸の神話（前掲）に、天兒屋命が太詔戸言を奏上した事に源を發し、祭祀と共に極めて古くからあつたものである。
- 三、現存の祝詞。現在の祝詞は醍醐天皇の延長五年に撰定した「延喜式」の卷八に收録せられた二十七篇（この中、東文忌寸部獻「横刀一時呪」だけを除く。）と、平安朝の末に藤原頼長の日記「台記」の「別記」に採録せられた「中臣壽詞」（これは祝詞と性質を同うするから祝詞と同一視する）の一篇とである。
- 四、祝詞制作の時代。この時代は詳かではないが、大部分は奈良朝以前の制作で、或るものは比較的新しく平安朝初期のものもあるらしい。而して尤も古色を帯びてゐるのは、「大祓」「出雲國造神賀詞」「中臣壽詞」「大殿祭」「御門祭」「祈年祭」「月次祭」等の諸篇であり、比較的新しいのは、「春日祭」「平野祭」及び伊勢神宮の諸祭に用ひる諸篇である。
- 五、祝詞の内容。二つの部分から成つてゐる。即ち第一は祭祀の來歴、由縁を物語る部分と、第二は、神徳を稱へ

て、幣帛を供へ、祈願を述べる部分とである。古い祝詞はこの二部分が完備して居り、比較的新しい祝詞には、この第一の神話的部分が略せられて居るやうである。故に祝詞の主要なる部分と見るべきは、第二の祈願をのべる方面といはねばならぬ。その點から祝詞を分類すると左のやうになる。

- 一、農事に關する祈願。祈年祭。廣瀬大忌祭。六月月次。伊勢大神宮六月月次。同神嘗祭。龍田風神祭。
- 二、朝廷又は天皇の御身に關する祈願。春日祭。平野祭。久度古開。道饗祭。鎮御魂齋戸祭。伊勢大神宮六月月次。同神嘗祭。齋内親王奉入時。
- 三、災禍に關する祈願。道饗祭。鎮火祭。遷却崇神祭大祓。
- 六、祝詞の修辭表現。言靈信仰から祝詞は生じた文であるから、文學的修飾に努めたのは勿論であつて、思想は雄大で、形式は莊嚴である。殊に用語は語を重ね、句を疊んで、冗漫の中に、自から悠揚せまらざる風格を備へ、鄭重な感を起させるやうにして、列舉法、反覆法、對句法などの修辭表現法を用ひてゐるのである。

上古史を讀んで

解説篇

教材

光輝あるわが國——この國體は開闢以來定められてきたものである。従つて、これは上古の歴史をよむことによつて、一層明確に強く教へられるのである。今日、國民精神總動員の効果は、むしろこの上古史即ち古事記、日本書紀をよんで、わが肇國の理想を知る方がたしかでもあり、よい効果が期待せられるとおもふのである。本課は、さうした時局的緊要性のみならず、また歴史のよみ方をも教へてゐる。われ／＼日本臣民は、かくのごとくにわが上代の歴史をよくよみ、かつ理解しなければならぬと思ふ。本課によつて、以上の二點を生徒に徹底させることは、大變必要なことである。

指導篇

扱方

本課は古事記及び日本書紀に書いてある内容をかなり手廣くとりあげて、現代の吾々がどのやうに理解すべきかを懇切丁寧に説明してゐる。主眼を聞き章節にわけて要約させ或は感想文を書かせる等、いろ／＼な方法があらう。

展開

第一節——我が國最舊の典籍は（から）遠つ祖の精神をも讀み得るのである。（まで）

わが國最古の史書は世界最古とはいひえないが、しかしその當時から皇統一系なのはわが國のみであり、又この史書によつてわれらの遠い祖先の精神をよむことができる。

第二節——二典の記事は神代に始つて（から）導きつゝあることを知らねばならぬ。（まで）

古事記、日本書紀の解説とその國家的意義。

第三節——我が神代史は我が國家の（から）この中に看取されるのである。（まで）

記紀の根本目的はわが國土の生成とともに開闢以來君臣の分の定つてゐるといふことにある。

第四節——我が國を開かせられた神の御末が（から）教はれた事を憶はなければならぬ。（まで）

肇國と天皇——従つて敬神と尊皇とは一體である。

第五節——皇室の御祖先を天照大神と（から）出來ないやうになつたのである。（まで）

皇室の御祖先、天照大神は太陽神として尊崇される。

第六節——由來農業國民は殊に（から）古神道の精神である。（まで）

上古史を讀んで

農業國日本と太陽。

第七節——天照大神は女性の神として（から）御神格の上に現れたとも思はれるのである。（まで）
天照大神と素盞鳴尊の御性格の差。

第八節——我が國列聖の御政治は（から）萬世一系の意義は其所に存するのである。（まで）

わが國列聖の御政治は皇祖の御遺訓を奉じて行はれる。萬世一系のありがたき意義はこのことにある。

第九節——我が國民と生れては（から）模倣する事は遠慮しなければならぬ。（まで）

以上のやうな國柄に國民として生れた我々の覺悟。

第十節——嗚呼我が記紀の二典よ（から）基礎はびくとも動かぬのである。（まで）

最古にして最新なる記紀の不朽の生命を稱ふ。

解 釋

※元明天皇 第四十三代の天皇。奈良朝初期の女帝。

天智天皇の第四皇女、文武、元正兩天皇の御生母。

即位の二年、武藏秩父郡の貫銅を以て銅錢を鑄造

し、年號を和銅と改め、尋で都を平城（奈良）に奠

め、又太安萬侶に勅して古事記を錄せしめ、諸國を

して風土記を上らしめた。養老五年崩御、寶算六一。

※太安萬侶 第十四、五課參照。

※元正天皇 第四十四代の天皇。女帝。和銅八年、御

母元明天皇の讓をうけて和銅八年、平城宮の大極殿

に即位。即位の日瑞龜を得て、靈龜元年と改め、三年

美濃國多度山の醴泉に幸して養老と改めた。八年讓

位。天平二十年崩御、寶算六九。

※舍人親王 天武天皇の第三皇子。淳仁天皇の御父。

文武天皇の朝、親王となつて二品に敘せられ尋で一

品に進んだ。太安萬侶と共に勅を奉じて「日本書紀」

を撰修した。官知太政官事に進み、天平七年薨去。

太政大臣を贈られた。

※エジプト 建國は西紀前三九〇〇年とも同五千年と

もいはれてゐる。この國は上古文明の一中心地であ

つたところで、ピラミット・オベリスク等古代の文

化を偲ぶべき遺物が多い。建國以來、王朝の興亡隆

衰甚だしく、外國に征服されたことも多かつた。現

在はイギリスの保護國である。

※支那 インドと共に東方文明の一中心地。その建國

はかなり古代にあるが、王朝の交代は甚だしいもの

がある。

※ギリシヤ ギリシヤ半島南部の半島國。本國は歐洲

最古の文明國であつたが、久しくトルコの重壓をう

け頹廢甚だしく、昔日の佛をとゞめない。

※ローマ 現在はイタリア帝國の首府の名である。こ

こではローマ帝國の意であらう。ローマ帝國はケー

ザルの子オクタヴィヤヌス文武の大權を一身に集め

て以後のローマ國の稱である。

※記紀 古事記、日本書紀を略して併稱するとき用

ふ。二書につき詳しくは十四、十五課參照。

※比倫 倫はひとしの意。比べうるものやひとしきも

のゝ意。

※開闢 國のひらけたはじめ。

※科學的見解 合理性を基礎とした學問によつて組み

立てられた意見。

乘荒唐不稽 確實な根據なしに、でたらめな説をなすこと。

乘淺薄皮相 うすつべらで、うはつづらばかりの。

乘宇宙創造説 この天地がどのやうにしてつくられたかといふことの見解。

乘伊邪那岐、美の二神 獨り成りませる神五代ののちはじめて現れた男女二神で、わが國土、山川、草木並びに皇祖の神々は悉くこの二神の生ませたまふところといふ。

乘神話 天地開闢の神々を主人公にした古代の物語。

乘をろがむ 拜むの古語。

注意

記紀の二典に關する種々の説話を上來學び來つた部分を生徒の記憶にのみがへらせ、かくすることによつてますます國體明徴の本義を徹底せしめたいと思ふ。

乘神祇 神は天の神、祇は地の神。

乘祈年祭 第十八課參照。五穀の豐穰を神に願ふ儀式である。

乘新嘗祭 神代以來行はれた宮中第一の嚴儀。古くは「にひなべまつり」ともいひ、また音讀して「しんじやうさい」ともいふ。現制では、毎年十一月二十三日、天皇神嘉殿に御して親ら天神地祇に當年の新穀を獻じ、御親らも聞食したまふことに定められてゐる。上代には民間でも一種の收穫祭の形式でこれを行つた。

一六 古事記より

解説篇

作者

太安萬侶

太安萬侶、古事記の撰進者。元明天皇の敕を奉じて古事記三卷を撰進した時が、正五位上勳五等で朝臣姓を稱してゐた。後、元正天皇の御時、日本書紀三十卷の編纂にも參與した。いはば日本修史事業上の大功勞者である。文學的方面からは彼は當時に於ける文章家の尤なるものでもあつた。古事記序文は彼の文章であるが、それを一見しても明瞭であるやうに、非常な名文家であつた。古事記の文體についても、いかに表現すべきかに餘程の苦心を拂つたらしいことは同序文に記された彼の文によつて窺はれるが、本課の文にも見えるやうな強健な文體——古事記文體として、日本文章史上に特筆大書されるべきものである。彼は後に氏の長者、民部卿となり養老七年（一三八三年）に従四位下で歿した。尙古事記そのものは稗田阿禮が誦習したものであり、それをこの名文體で書いたのが彼であるといふことは、本書の解説中に述べておいた如くである。

引用書

古事記。「フルコトブミ」とも訓むが、古くから「コジキ」と音讀してゐたらしい。元明天皇和銅五年（一三七二年）

正月二十八日、太安萬侶が敕をうけて撰んだ我が國の古記録である。本書の成立については撰者が序文に詳記してゐるやうに、修史事業に御熱心であつた天武天皇が、諸家の有する帝紀及び本辭の正實に違つてゐるのを歎き、正しい帝記を撰録し、舊辭を討覈して後世に傳へようとし、舍人稗田阿禮に命じて帝皇日繼及び先代の舊辭をよみならはせ給うたのを、元明天皇か和銅四年九月十八日に太安萬侶に敕して、阿禮の誦した舊辭を編ませ給うたのであつて、安萬侶は四ヶ月あまりでそれを書き上げて献上した。さて古事記の本質は何であるか、傳説集、神話集、歴史記述、神道經典等ともいへるが、要するに、我が古代の祖先が元始的な生活に多分の夢と空想とを混じて謳つた生々發育主義的な「生の歡喜の記録」であり、「我が邦文化の搖籃」の具體化されたものであると見られてゐる。我が古典文學の最大なるものの一である。文章は漢文で書かれてはゐるが、純粹の漢文體ではなく、漢字を單に音符文字として國語をうつした所が多く、これらは凡て字音で讀ませてゐる。だから國文脈を主とし、漢文を交へた文體であるといつてよい。古事記假名ともいはれるのはその故である。文章味は素朴で具體的表現に富んでゐて、生々とした潑刺さが見られ、書中の歌はすべて一字一音で表した全く純粹な國文であつた。上卷(神代卷)は天地開闢から日子波限鷯草葺不合尊まで、中卷は神武天皇から應仁天皇まで、下卷は仁德天皇から推古天皇までを記し、上卷は神話を、中・下卷は歴史を述べてゐるが所々に傳説や物語が織りこまれてゐて、神話から歴史に移つて行く上代文學の自然展開の跡を示してゐるのは注意されるに價すると思ふ。註釋書は最も多い中に古事記傳(本居宣長)古事記新講(次田潤)詳解古事記新考(田井嘉藤次)古事記評釋(中島悅次)等最も好い。本課には原文を假名交り文に書改めて、上卷にある「伊邪那岐神饗被」「三貴子の分治」「須佐之男命哭きいさちる」「天安河の御誓」「一」と「八俣の遠呂智」「須賀宮」「二」の即ち須佐之男命に關する興味的なものを描いた。

教 材

我が國の古文學としての草分けである古事記の價値に就いては、既にあらゆる人々からいはれてゐる所であるから、改めて説明を要しないことである。本課はその古事記中から、神話時代の英雄として、最も我々の親しい情感を持つ須佐之男命(素盞鳴尊)に就いて、その御生立のそも／＼からを抜萃綴續したのである。現時國民思想の動搖し易い秋に當つて、我が國體國民思想の確立を計る爲には、古典の研究がその對象とならなければならぬ。その意味からして、古事記はもつと我々に近いものとならなければならぬ。上古の文學として、中等學生などには到底近寄れない遙かの彼方にあつたと思推しがちな生徒に、本課がその謬見を打破させ、この古事記に、もつと／＼親しさを感じさせるならば、教授の主意は十分に達せられたとすべきであらう。

指 導 篇

扱 方

教材の項にも述べたやうに我が國體の鮮明といふ點に主眼を置いて教授されたい。で、一は天照大神と須佐之男命との御關係としては武勇の中に人情を包み、柔和の中に雄々しさのある理想の權化であること、二は須佐之男命が御

氣象の武勇を示されて無禮者共を平定されて、大和民族發展の基を作られた點を力説されたい。そのためには次課と聯絡する必要もあらうが、既に修めた國史の知識を利用することも一策であらう。文章方面としては、古事記式の文體として、その簡素、雄健であること、王朝期文體との比較を以つて悟らせるのも効果があらう。要するに初歩的な、興味本位にのみ留らずに、一步進んだ觀察力を以つてせられたいと思ふ。その意味で参考を附けた。

解 釋

速須須佐之男命逐はえて 「逐はえて」は原文に「所避道而」とある。追放せられての意。「え」は「る」に當る古い受身の助動詞ゆの連用形。こゝは「天安河の御誓の段」の後の「天の眞名井」「須佐之男命所生の神」「須佐之男命の暴戻」「天の石屋戸」「須佐之男命追放」「五穀の種」の數段をうけた所謂「八岐の遠呂智の段」である。で、この「逐はえ」は「須佐之男命追放の段」の「こゝに八百萬の神共に譲りて、速須須佐之男命に千座置戸を負ふせ、また鬚を切り、手足の爪をも抜かしめて、神逐ひ逐ひき」とあるのをうけてゐる。

肥の河上 肥といふ地にある河の上方の意。今の斐伊川。「肥」は出雲風土記によれば神龜三年に斐伊と改められた地名で、それから河の名ともなつた。尙頭註参照。

鳥髪之地 同風土記に「仁多郡鳥上山、郡家東南三十五里、伯耆與出雲之堺」とある。今は船通山ともいふ。尙頭註参照。

唐韻云、筋匙也、字亦作箸、和名波之」とある。

今の匙の形をしたものと思はれる。和名抄に

社と神名帳にある。「山津見」は山つ持ち、「大」はその首領の意。

奇稲田媛 書紀には「奇稲田媛」とある。楯は奇

田といふ地名に關係があるといはれてゐる。

八稚女 多くの處女。「八」は彌で複數を示す語。

出雲國神門郡古志郷（今の簸川郡高志村及び布智村）か、越の國（越前、越中、越後の地方）かともいはれてゐる。

八咫遠呂智 身一つで頭も尾も八つある大蛇。「八」を複數だとすると頭のいくつもある大蛇の意となる。「をろち」については宣長オドロチの略とし、オ

その河より流れ下りき ——その斐伊川の上から流れ下つて來た。同風土記に「此則所謂斐伊河下也（略）自河口、至河上横田村、五郡百姓、便河而居」とある。

人ありけり 住んでゐる人があるわい。

尋ぎのぼりいでまし、かば 尋ね求めて上流の方に往かれたら、「尋ぎ」は「覓ぎ」と同じく尋ね求める意。書紀には「時に川上に啼哭聲有るを聞き給ふ、故れ聲を尋めて覓ぎ往ませば」とある。

置いて。坐らせて。原文に「置中而」とある。

國土に先住した民の首領。高天原の神を天

つ神といふに對した語。

大山津見神 二神國生みなされた時久能智神（草の神）の次にお生れになつた山の神。伊豆國三島神

下口はおどす等のオドで、恐るべき意義があり、チは威力のある者の美稱であるとしてゐる。又野村八良はヲロはアイヌ語のヲロで、山岳又は河川の意義であらうといつてゐる。即ち恐るべき他族の酋長の意（前説）と山岳又は河川のうねつてゐる威力のある敵國の意（後説）といふことになる。尙参考の項参照。

倭なもーなる「なも」は「なん」に同じく係り結びの語形をなしてゐる。八俣遠呂智がね、毎年來て喰ふのですよといふ文意。

倭赤加賀知なし 赤漿酸のやうで。

倭谿八谷、峽八尾 尾は丘、「八」は複數。多くの谿谷や多くの山の裾を取り巻いてといふ文意。

倭あえたゞれたり 血がにじみ出て、たゞれてゐます。「あえただる」は原文は「爛」の字。

倭醸み 「かもし」の古語。字鏡に「醸造酒也、佐介加无」とある。

倭作り廻し 作りめぐらし。

倭さすき 書紀に「假殿此云佐受枳」とある。物を見るために作つた假の床の名である。

倭酒船 酒を盛つた槽。「船」はすべて容器をいふ。

倭待ちてよ 待つてゐなさい。

倭設けそなへて 備準を整へて。

倭まことに言ひしがごと ほんたうに老人がいつたやうに。「ごと」はごとの古い語法である。

倭十拳劍 十つかみもある長い劍。

倭切りはふり すぐ／＼に切ること。原文に「切散」、書紀に「一寸斬」とある。

倭かしこけれど云々 直ちに承諾しないので恐れ多いことですが、あなたはどなた様でいらつしやいませうか。上古には嫁するには必ずその男の名告を聞く習慣であつたからである。

倭いろせなり 同じ母の兄弟である。「いろ」は特に親しい意を示す語。いろ母、いろ妹とあるやうに血統の同じ意の言葉である。

倭湯津爪櫛 齒の喰ひこんだ細かい櫛。「湯津」は五百箇で數の多い義で櫛の齒の多いこと。「爪櫛」は櫛の齒の密につまつてゐる櫛、又は爪形の櫛ともいふ。

倭取りなして 變化させて。こゝはそこでその少々（櫛名田比賣）を齒のこんだ細かい櫛に形をかへてしまつて、御自分の御髪におさしになりといふ文意。

倭八鹽折の酒 幾度も繰返して醸した強烈な酒。「八」は彌、「鹽」は入、「折」は繰返す意。

倭つむがりの大刀 刀身の尖つた大刀で、「スガリ」に同じもの。「ツムガリ」はツカリと同じく刀の切れ味のよい形容だとする宣長の説もあるが、今日では前説が行はれてゐる。

倭まをし上げたまひき 奉獻なされた。

倭こは草那藝之大刀なり これが後でいふ草那藝之大刀であるの意。書紀に「これ所謂草薙劍なり、一書曰く本の名は天叢雲劍、蓋し大蛇の居る所の上に常に雲氣有りし故に名たる歟、日本武皇子に至て改めて草薙劍と名曰き」とある。今は尾張國熱田神宮に奉安されてゐる。これで「八岐遠呂智の段」は終つて、「須賀宮の段」に續く。

倭故、こゝをもて さて、これによつて。櫛名田比賣を得給ふたのでの意。

倭宮造るべき地 婚儀を行ふ爲に新殿を造るべき場

所をいふ。

須賀の地 出雲風土記によれば大原郡須賀山が須賀

宮の遺跡であるといふ。尙頭註参照。

亟清々し 心が爽快であること。

亟ましましける お住ひになつた。

亟今に須賀とぞいふ 命のお言葉によつて、今

でも須賀といふ。この地について宣長は、大原郡の

須賀山と熊野山は並んでゐるから熊野神宮が、即ち

この須賀宮の所であらうといつてゐる。

亟この大神 はじめて大神と神名を用ひてゐる。それ

について宣長は熊野宮に鎮坐してゐるところを指し

て申すからだといひ、文意は今でも須賀宮に鎮坐し

てゐるこの大神はの意だとし、尙須賀と熊野とは一

つであつたのが、山川には須賀の名、神宮には熊野

といふ名が残つて、別物のやうになつたのだともい

つてゐる。

亟やくもたつ 御神詠である。「やくもたつ」は彌雲起

の義で、雲が幾重も重つて立ち上ること。後世出雲

の枕詞とするのはこれからである。「出雲やへがき」

は立ち上る雲が八重の垣となる意、出雲といふ地名

はこれによつて出たといはれてゐる。「つま」は妻

夫の何れをも、又合せて夫婦の意にも用ひる。こゝ

は「ごみに」と自動詞であるから夫婦の意。書紀に

はつまごめと他動詞になつてゐるが、それだと妻ご

めの意になる。「ごみ」はかくれこもる意。「八重垣

を」の「を」は詠歎詞で「よ」に同じ。一首の意は今

こゝに須賀宮を建てて夫婦一緒にこもらうとする折

も折、あれあのやうに八重雲が立ち上つて来た。そ

れは丁度私たち二人の闇のかこみの八重垣を作るや

うだ。あゝその八重の垣となる雲よ、といふのであ

る。原文にはこの御歌の後に「ここにかの足名椎神

を喚して、汝は我が宮の首たれと告りたまひ、また

名を稻田宮主須賀之八耳神と負ふせたまひき」とあ

つてこの「須賀宮」の全段は終つてゐる。この御神

詠について田中義能博士は「八雲立つの歌は五七五

七七となつてゐるので、神代ものではないと主張

するものがある。併し吾々は之を後世の挿入である

といふ説に同意することは出来ない。尤も歴史的立

脚地から見ても、口々に相傳ふる間に、比較的單純で

注 意

國體の鮮明といふ點に主眼を置き、一は天照大神と須佐之男命との御關係としては武勇の中に人情を包み、柔和の中に雄々しさのある理想の權化であること、二は須佐之男命が御氣象の武勇を示されて無禮者共を平定されて、大和民族發展の基を作らせられた點を力説したい。そのためには既に修めた國史の知識を利用することも亦一策であらう。文章方面としては、古事記式の文體として、その簡素、雄健であること、王朝期文體との比較を以つて悟らせるのも効果があらう。要するに初歩的な、興味本位にのみ留らずに、一歩進んだ觀察力を以つてせられたいと思ふ。

資料篇

参考研究

「八岐遠呂智」の傳説について次田潤氏の著、「古事記新講」がもつとも要を得てゐるので、左に抽く。この傳説は怪物退治物語の最古のものであるが、その中に又生贄傳説、靈劍傳説の祖と見るべき要素も含まれてゐる。即ちこの傳説には、大蛇が犠牲を求める事と、犠牲となるべき少女が救はれて英雄の妻となる事、及び、英雄が靈劍を得る事と、この三要素から成立してゐる。武力又は靈劍傳説は戸隠山、羅生門、大江山、田村將軍の惡魔退治や土蜘蛛退治の傳説があり、今昔物語の生贄傳説などがある。(略)が、この須佐之男命の神話中で最も注意を索く事は、三種神器の一なる神劍の由來を物語つてゐる點である。歴史家の説によれば、日本民族は先史時代に於て、青銅器と共に鐵器の使用法を傳へられてゐた事が明白となつてゐる。(略)中國殊に出雲備後地方に於て、上古に鐵器使用が行はれた事は、その地から發掘される遺物によつて證せられるばかりでなく、この地方は古來砂鐵の産地として名高い。(略)然らば出雲氏族の隆盛の原因の一が、この鍛鐵法の上にあつたと見て差支ない。かく見る時は大陸の文化を韓半島から盛んに輸入した出雲氏族の祖神と仰がれた須佐之男命の英雄神話の中に靈劍傳説が結合されて、それが砂鐵を多量に産する肥河の上流地に傳へられてゐるといふ事は頗る興味がある。以上の事實によつて右の神話を眺める時は、大蛇の身に藁檜杉の類が生ひ茂り、その長さは箱八谷峽八尾に涉り、而もその腹には常に血が流れてゐるといはれるの

は、單に大蛇の物凄ゝ形容であると見るわけに行かない。大蛇の姪々として蟠る有様は、肥河のうね／＼と山谷を流れて行く狀を表はし、樹木の生ひ茂つた形容は、その兩岸の有様を物語るものであり、血は即ち砂鐵より生ずる金氣水の形容と見る事が出来る。又叢雲劍の名の起源は鳥上山の嶺が常に雲霧に蔽はれてゐる事を意味するものであり、年々犠牲に供へられる少女は水神に奉る犠牲であつて、年々一人づつの可憐の少女が選ばれて、深淵に沈められた古い習慣が、この地に存してゐた事を語つてゐるやうにも思はれるのである」と。又「傳説地」についてもつぎの如く記して居られる——この神話の傳説地に就いては種々の異説があつたのである。書紀本文に古事記と同じく「出雲國簸之川上」とあるが、書紀一書には「安藝國可愛之川上」とし、又他の一書には「其素盞鳴尊斷蛇之劍、今在吉備神部許也、出雲簸之川上是也」とある。これ等を見て、同じ傳説が出雲、安藝、吉備に傳へられてゐた事が知れる。喜田博士は、書紀一書に安藝の可愛川上は今の江川の上流である、江川は斐伊川上の船通山から發して石見に注いでゐるが、その上流が安藝に屬してゐるので、安藝國可愛川上と傳へられたのである。(略)次に同じ船通山から出た日野川があつて、是は東北に流れて夜見濱に注いでゐるが、その上流に崩御山があつて、伊弉册尊崩御の傳説地とされてゐるから、日野川も亦伯耆に於ける素盞鳴尊の傳説を有つてゐたであらうと思はれると説いてゐる。」とある。これ等によつて「大蛇」そのものと「傳説地」との概念は親はれると思ふ。

一七 古事記を通じて見た我が祖先の生活

相馬御風

解説篇

作者

相馬御風。詩人、評論家、作家。氏は本名を昌治といひ、明治十六年七月十日、新潟縣糸魚川町に生れた。糸魚川小學校、高田中學校を経て、明治三十九年早稻田大學英文科を卒業した。で、氏の文學者としての生活は、何時の頃より芽ぐみ、どう發達して來たかといふと、氏の文學は詩歌から芽ぐみ始めたのであつて、中學時代から雑誌「新聲」「文庫」「心の花」等を愛讀し、佐々木信綱博士や金子薫園氏を非常に崇拜し、三十五年には與謝野寛氏の新詩社に入り、その同人ともなつた。しかし、僅か一年にして新詩社を去り、三十六年には岩野泡鳴氏、前田林外氏等と詩歌専門雑誌「白百合」を發行し、まづ詩人として世に立つた。三十九年には、第一歌集「睡蓮」を、四十一年には「御風詩集」を公にしてその婉麗な詩風を認められ、後には口語詩を主張したが、やがて評論家へと方向を轉じ、自然主義文學勃興當時の文壇に論陣を張り、評論家として覇を唱へ、三十九年以來、雑誌「早稻田文學」を主宰し、四十四年には早稻田大學講師となり、大正元年には最初の評論集「黎明期の文學」を新潮社より發行。氏の全盛は確かにこの時代にあつたのである。なほ大正二年には故島村抱月を助けて藝術座を起し、演劇運動に力を盡した。以後は感想

集、創作、評論集、翻譯等を矢つぎばやに公にして文壇に雄飛したが精神生活上に革命起り、遂に一個の凡人たらんとして、大正五年の春、「還元録」の一篇を残して郷里糸魚川に隱退し、良寛、一茶等の研究に没頭して今に至つてゐる。著作には、歌集「睡蓮」「御風詩集」、評論集「自然生活と文學」「黎明期の文學」「凡人淨土」「毒藥の壺」「第一歩」、翻譯トルストイの「アンナ・カレニナ」「我が懺悔」「人生論」「性慾論」等及びツルゲエネフの「その前夜」「父と子」「貴族の家」、創作集「峠」、なほ外に研究として「大愚良寛」、隨筆として「田園春秋」「對山雜記」「沙上漫筆」「雜草苑」「野を歩む者」「第二の自然」等がある。前にも記した通り、氏は詩人であり、小説家であり、批評家であるが文學者としての重なるエレメントは、詩人としての氏と、評論家としての氏であつて、しかも最もよく文學者として氏を世に知らしめたものは、評論家としての氏である。そしてその評論の風は、極めて鋭敏な温い親切な鑑賞的な評論であるといふことが出来る。決して單なる冷たい理智的な評論ではない。故に故中澤臨川も大正元年十一月の「文章世界」誌上に於て、氏の「黎明期の文學」を評して、次の如くいつてゐる。「今日の文壇に批評家として立つてゐる人々のうちで、相馬御風君は私の最も尊敬してゐる人の一人である。氏は多方面の人であり、努力の人であり、また趣味の人である。抽象的の哲理や概念を先にして壓伏せ^{おさ}たやうな物のいひ振りをする人たちや、神經質の勝つた低級の印象をそのまま、好惡の判断を下す事を憚らない人たちの多い世の中に、氏の如く温い鑑賞を有つた批評家は異數としなければならぬ。深嚴な論理的批判や、光のある獨斷や、力強い否定肯定やを氏に望むのは不可能であるにしても、温い鑑賞だけでも十分である。實際、今日までの氏の批評の生命はこゝにあるやうに思はれる。」全く

御風氏の評論の風は、この臨川氏の言葉によつて盡されてゐる。そして、それが鋭く、しかも潤ひのあるデリケートな文章に依つて書かれてゐるのである。

引用書

相馬御風著「黎明期の文學」前項に説明しておいた。

教材

古事記が我が國最初の史書であり、しかもそれが専門的に研究した結果の記録ではなく、流傳口誦千年を経たおはなしをそのままに書き記したものである——ことを思つただけでも、それは十分に我々の心を惹きつけるに足るものである。しかもその古事記の中に盛られてゐる當時の人々の生活こそは、自然から人間に與へられた——自然が人間に教へてくれたまゝのものであつた。そこには、人間が文明の進歩につれて作り出した法律や道德などは存在してゐなかつた。また佛教も儒教も、彼等の情操生活の上には未だ何等の制御をも加へてゐなかつた。従つてそこには何等人造的な苦痛はなかつたのである。彼等はたゞ彼等自らのこゝろのまゝに喜び、悲しみ、恐れ、そして信仰した。——自然は一切の生物に對して徹底的に生きることを要求する——時には生きるための行動が、反つて死を招致するやうな逆説的な結果を生むことが屢であるまでに……。未だ何等の人工的文明や道德に支配せられてゐなかつた我が祖先たちが、どこまでも明るく、快活に、のび／＼と生を謳歌しつゝ生きてゐたのはまことに當然なことである。本課はその古事記に現れてゐる我が祖先たちの生活——主として精神生活を詳述した相馬御風氏の文である。一般的な古

代人の生活の研究である。本文が我々現代人にとつてどのやうな重大な暗示を與へるか——どんな感銘を起させるか——十分な心構へを以て読んで頂きたいと思ふ。

指導篇

扱方

古事記が我が國最初の歴史書であり、しかもその叙述するところは、わが國の開闢に始まつて上代の推古天皇に至る。そのうち特に神代巻と稱せられる部分については、日本書紀と並んで稀な史籍でもある。これが千古不朽の書であるといふことは即ち遠い末孫の現代日本の吾々にも教へるところ多々あるといふ意味にほかならぬ。本課はそれを具體的に示してゐるものである。古事記の内容の國民として知るべきであることを思出させると同時に、またそこかのどのやうにして現代における教訓をみちびき出すかといふことを示してもゐるものとして取扱はれたい。

展開

第一節——我々の祖先の最も（から）日本民族の生命の源であると思ふ。（まで）

古事記の史書としての價值を述べ、またそれが現代の吾々にも、生活の源泉ともなるべきものであることを提示する。

第二節——古事記を読んで吾々の（から）生と變へなければ止まなかつた。（まで）

古事記を通じて見た我が祖先の生活

古事記をよんで第一に感ずるのは、生命力の強さとそれを稱讃してゐる叙述とである。

第三節——次に我等祖先の神は（から）逆ふところの物の衰滅を信じた。（まで）

第二に感ずるところは、敬神の念であり、神の威力を信じてゐたといふことである。

第四節——偏に生活の發展と（から）古事記以外にはこれを求め得られないと思ふ。（まで）

以上のことから往々にして最高の悲劇的な努力な生活が展開される。

第五節——古事記中に書かれた數多の（から）歎聲を禁じ得られなかつた。（まで）

その悲劇的生活は澤山あるが、そのうちの一人は日本武尊である。

第六節——かくて尊はあらゆる困難と（から）積極的であつたかに驚かれるではないか。（まで）

日本武尊の御事業と苦難と、しかもその御臨終の御歌に漲る積極性。

第七節——更に驚かれる事は（から）一刻に休なき努力の生涯であつた。（まで）

尊が薨後白鳥と化したといふのはその努力的御生涯の美しい象徴である。

第八節——いかなる境遇にあつても（から）古事記に於てのみ見られると思ふ。（まで）

日本武尊に於て代表的に見出される努力、發展の積極性と強靱性は文學には古事記においてのみ見られるものである。

第九節——外に向つて最近著しい（から）憧憬の念が湧くのを覺える。（まで）

古事記の現代的價値の強調。

解 釋

※日本書紀 三十卷。古事記に次ぐ古史籍で、神代か

ら持統天皇の御代までの歴史である。舍人親王が、

元正天皇の勅命を奉じて撰したるもの。養老四年五月

二十一日完成。歌謡以外は華麗な漢文を以て書かれ

てある。内容の豊富、體裁の整齊、衆説を網羅した

る點等、到底古事記の及ぶ所ではない。が、しかし、

餘りに精細過ぎ、文飾に妨げられて、傳説、史實の

眞を失つてゐるといふ虞がないでもない。註釋書に

は鎌倉時代の釋日本紀、降つて一條兼良の日本書紀

纂疏、尙降つて谷川士清の日本書紀通證、鈴木重胤

の日本書紀傳、飯田武卿の日本書紀通釋等がある。

※潤飾 じゆんしよく かざること。

※表象化 表象すること。こ、は、史實的に、具體的

古事記を通じて見た我が祖先の生活

に、記録せられてはゐないかも知れないが、祖先の生活全體の持つ色彩なり匂なりは古事記一卷によつて表象されてゐるの意である。

※佛儒二教 ぶつじゆ 佛教と儒教。正史によれば、欽明天皇の

十三年十月、百濟王が佛像經論などを獻したことを

以て、佛教の日本傳來の初とされてゐるが（即ち蘇

我稻目「崇佛」と物部尾與「排佛」との爭論の時

ある。）史實の研究によれば、それ以前繼體天皇の十

六年、司馬達等來朝して大和に布教したといはれ、

又その子である多須那が出家して徳濟法師といつ

た。これが日本人出家の始だといはれてゐる。儒教

は儒學の教で、儒學は支那古來の傳統的な政教一致

を旨とする學問で、孔子出でてこれを集大成した。

その孔子の言行を記した論語が渡來したのは第十五代應神天皇の朝となつてゐる。勿論それ以前にも九州北部あたりにはすでに傳來してゐたかも知れない。が、神功皇后の新羅征伐で、熊襲が勢力を失ふや、朝鮮海峡の交通が自由になり、盛んに支那文化が輸入される事になつた。應神天皇の十五年百濟から阿直岐來朝し、太子菟道稚郎子はこれに従つて漢學を學ばれ、翌年、王仁來つて論語、千字文を獻じ、太子またこれを師とされたといふ。しかし儒教の方は佛敎と異なり、當時はたゞ傳來したといふだけのことで、廣く一般に行はれるやうになつたのは、すつとすつと後世の事で、一般の國民の上には何等の影響をも及ぼさなかつた。

巫の空氣の混じてゐない さういふ二者の影響を受けてゐない。勿論古事記は前記したやうに、既に

佛儒二敎の渡來後——推古天皇の御代までの歴史を含めてはゐるが、これ等二敎が推古天皇の御代までの間に一般國民の思想感情の上に影響を與へ得るだけの、時間的餘裕を有してゐなかつたことはいふまでもなからう。

巫自己の生活に統一しよう あらゆるものを自分の生活の中に攝取し、あらゆるものを何等かの意味に於て自己のものとしようとする。なほ本文に詳しく説明してある。

巫彼等の觀た自然は云々 自然はすべて神——やはり自分たちを生み成した神の生み成したもので、即ち悉く神の分身として生きて存在してゐるものであり自分たちの生活と一々生きた交渉を持つものであつた。決して自分たちの生活と交渉に存在してゐるのではなかつた。

巫彼等の認めた神は云々 これは説明するまでもなく

明らかである。彼等は自己の抱く最高の理想憧憬を悉く實現し得るものとしてのみ神を信じた。彼等の信ずる神は、過去に於て、又現在に於て、極りなき勢力を以て生きた働きをなしたものであり又なしつゝあるものであつた。それはとりもなほさず彼等人間の生活力を象徴してゐるものに外ならない。従つて換言すれば、彼等の信ずる神ほど人間的なものはない。彼等人間のしたいこと、彼等人間の求めてなし得ない偉大なこと、それ等すべては彼等の信ずる神によつてなされてゐるのである。

巫人間の肉體から分化して出たもの云々 「爾に大氣都比賣、鼻口及び尻より種々の味物を取出して、種々作り具へて進る時に速須佐之男命その態を立ち伺ひて、穢汚物奉進ると思はして、乃ちその大

古事記を通じて見た我が祖先の生活

氣津比賣神を殺し給ひき。故殺さへ給へる神の身に生れるものは、頭に蠶生り、二つの目に稻種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麥生り、尻に大豆生りき。故是に神產巢日御祖命これを取らしめて種となし給ひき。」(古事記) 本文に「人間の肉體云々」とあるが、この當時にあつては、一切の人間が即ち神だつたので——つまり後世の人間にあたるものがすべて神だつたわけである。で、このおぼげ、つひめをも筆者は假に人間といふ言葉を以て取扱つたのである。

巫死の國にある伊邪那美命が云々 古事記に「最後

が那勢命かくしたまはば、汝の國の人草一日に千頭
紋り殺さん。」とまをしたまひき。こゝに伊邪那岐命
詔りたまはく、「愛しき我が那邇妹命、汝しかしたま
はゞ、吾はや一日に千五百の産屋立ててん。」とのり
たまひき。是を以て一日に必ず、千人死に、一日に
必ず千五百人なも生まるる云々。」

倭汝が國 即ち生の國——この世。本居宣長は「抑、御
親ら生み成し給へる國をしも、かく他げに詔ふ。生
死のへだたりを思へばいともかなしき事にさりけ
る。」(古事記傳)といつてゐる。

倭人草 もろくの人。青人草。庶民、蒼生。

倭千頭、千人。

倭さし給はば さうなされるなら。

倭我はや 「や」は強めの助詞。

倭産屋 古へ子を産むために新に作つた家。産所。「一

—立ててん」は、千五百人生まうといふ意。「たゞに
産まんとは詔はで、産屋を立ててんとしも詔へる
は、上代の言に子を生むをしかいひならはしけん。
榮華物語根合巻に大將殿も女御の御産屋四月なる
に、今二月、三月をすぐさせたまはずなりぬる、い
みじうくちをしようおぼしなげく云々、これも御産の
ことを御うぶやといへり。(古事記傳)

倭生の力が飽くまでも云々 たとへば生の國の伊邪
那岐命が死の國の伊邪那美命の遣された豫母都志許
賣に追撃された時などは、全然「生」と「死」との
争——古代人がどんなに死を征服しようとしてゐた
かといふことを象徴してゐるものである。「——即ち
豫母都志許賣を遣して追はしめき。故伊邪那岐命、
黒御鬘を取り投げ棄てしかば、乃ち蒲生子生りき。こ
をひろひ食む間に逃げ行でますを、なほ追ひしか

ば、亦その右の御美豆良に刺させる湯津津間櫛を引
きかきて投棄てたまひしかば、乃ち笋生りき、こを
抜き食む間に逃げ行でましき。また後にはかの八の
雷神に、千五百の黄泉軍を副へて追はしめき。爾ち
御佩かせる十拳劍を抜きて後手にふきつつ逃げ來ま
せるを、なほ追ひて黄泉比良坂の坂本に到る時にそ
の坂本なる桃子を三つとりて待ち撃ち給ひしかば、
悉に逃げ返りき云々」(古事記)即ちこゝに於て生
は完全に死を追ひらひ、征服したのである。

倭多神的 多神教の性質は帯びること。多神教は性質
を異にする多数の神を崇拜する宗教。即ち統一的傾
向が未だ發達しないで、諸神が並立對抗の關係にあ
る宗教。

倭自然物崇拜 自然物——山とか木とか石とかを神と
思惟して崇拜すること。

古事記を通じて見た我が祖先の生活

倭救済を祈る様な云々 純粹な崇拜讚美の念だけ
で、自分のたましひの救済——頗る不適當な例だが、
たとへば死後のこと往生のことなどを祈るところは
少しもなかつたの意。救済はやはりこのやうに解す
るより外はない。現世に於ける「我の生活の幸福に
對する」神の助力は希つたのだから。分子は、こゝ
では、ある一つの事物を構成してゐる個々のもの。
倭念力 思ひこんだ力。精神のそゝぎ向ふ力。こゝは
神を崇ひ信する——その信念といふやうな意。

倭逆らふ所の物云々 そのやうな信念に、反撥する
ものは當然あつてはならない、衰へ減びてしまはな
ければならないと信じた。率直、單純、大膽な古代
人の信念をいつたのだ。

倭境遇に屈する事を知らぬ 境遇に負かされる——
自己の生活意志に反するやうな境遇はどこまでもこ

ちから打壊しようとする——。

※意志その物の悲劇 意志がなく——少くとも非常にその力が弱く、他から與へられた境遇のまゝに引きずられて行く者になら決して起らない悲劇——境遇と、それに「屈することを知らぬ」意志と、この二者の間に必然的に起る——否、意志の(抗争)そのものの生み出す悲劇。そのものは、他の何物でもなす意志といふ風に意志を強める語。悲劇(Tragedy)は悲惨な世相を描寫した演劇。喜劇の對。

※文藝 文章によつて創られた藝術。

※生活意志 生活の——自己をあくまで自己らしく生かさうとする、その意志。

※日本武尊 第十二代景行天皇の皇子。本名は小碓尊、一に倭男具那とも申し上げ、雙生兒にましまし、御兄の方は大碓とも申し上げた。尊は容貌魁偉

身長一丈に及び力はよく鼎を扛ぐと傳へられる。二十八年、十六歳の御時、勅命を受けて熊襲の討滅に向ひ、熊襲の國に到つて形勢を伺ひ、その渠師取石鹿文の宴に乗じて、女装し劍を懐にしてその席に入り、渠師の醉へるのを見てこれを刺し、渠師は日本武の號を上つて死んだ。更に天皇の四十年東夷が叛して人民を掠めたので、尊は又勅をうけてこれを征した。途中伊勢神宮に参拜して姨倭姫命より天叢雲劍を授けられた。その劍の威靈によつて駿河に野火の難を免れ、却つてその賊を滅し、相模から走水の海を渡つて上總に入つた。時に海上に風波立ち、妃弟橘姫の海に入るに及んで、風止み無事着岸するところが出来た。後近江の伊吹山に賊があると聞かれ、草薙劍を留めてこれに向はれたが、俄に病を發し、尾張に歸り、伊勢に移られ、能褒野に至つて病篤く

なつて薨去された。御年三十二。能褒野に葬つた。更に白鳥の祥によつて大和の葛城、河内の古市に白鳥陵を營まれた。

※弟橘比賣 日本武尊の妃。尊の東征に従ひ相模の海を渡らうとする時、暴風が俄に起り、船が將に覆没しようとしたので、比賣は身を以て尊を救けるために海に投じて死なれ、その爲に暴風は直ちに止んだといふ。尊は東夷を平げ、歸途足柄峠(書紀には碓日峠とある)に至り、東方を望み、比賣のことを追懐して「あづまはや」と仰せられた。東國を「あづま」といふのは、これに基づいてゐるのであるといふ。なほ次項以下参照。

※眼前で犠牲とする 「それ(駿河焼津——あの草薙劍の話で有名な——)より入り幸でまして走水海(浦賀海峡)を渡ります時に、そのわたりの神浪をた

てて、船たゆたひて得進みわたりまさず。爾にその後、名は弟橘比賣命白したまはく「妾御子に代りて海中に入りなん。御子は所遣の政遂げて、かへりてと奏し給ふべし。」と、申して、海に入りまさんとする時に、萱疊八重、皮疊八重、繩疊八重を波の上に敷きて、その上に下り坐しき。こゝにその暴浪自ら伏ぎて御船得進みき。かれその後の歌はせるみうた、「さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて、とひし君はも。」かれ七日ありて後に、その後の御櫛海邊に依りたりき。乃ちその櫛をとりて御陵を作りて治め置きき。」(古事記)

※その妻を慕うては「阿豆麻波夜」云々 「それより(前項よりすぐ續く)入り幸でまして、悉にあらぶる蝦夷等を言向け、また山河の荒ぶる神等を平和して還りのぼります時に、足柄の坂本に到り(略)、

その坂に登り立ちて三敷かして、「阿豆麻波夜」と詔りたまひき。」(古事記)「あづま(吾妻)はわが妻。「はや」は感謝詞。書紀にはこの御言葉の前に、「日本武尊毎有願弟橋媛之情……」と説明がついてゐる。即ちこれは業を成就して還幸の途に時に立つて東國を望まれ、自分の爲に犠牲となられた后を懐ひ、感慨無量に沈まれた——その歎聲なのである。

伊勢 伊勢國——三重縣。尊は東國平定後、甲斐、美濃を経て尾張に至り尾張國造の許に御滞在中、近江の伊吹山に邪神があるとお聞きになつたので、征伐に向はれた。が、不幸にしてこの時あたりから病に罹られたので、止むなく引返され、伊勢に路をおとりになつて都へとお急ぎ遊ばしたのである。尊のお崩れになつたところは伊勢の能煩野(三重縣鈴鹿郡にある廣大な野。能煩野陵は、現在、鈴鹿郡高津

瀬村にある)であると傳へられてゐる。伊恒は虚をも翔り行かんと念ひつるを 今までは鳥のやうに空をも飛んで行かうと思つてゐたのに。「行かん」は現在都へ空を飛んでも早く歸つて行きたい——の意ではない。宣長は古事記傳で、「恒にかくおもほしたりしは、いと武く猛々しく勇みたる御心なればぞかし。大丈夫の心は誰もかくこそあらまほしけれ。」といつてゐる。

伊勢 伊勢國——三重縣。尊は東國平定後、甲斐、美濃を経て尾張に至り尾張國造の許に御滞在中、近江の伊吹山に邪神があるとお聞きになつたので、征伐に向はれた。が、不幸にしてこの時あたりから病に罹られたので、止むなく引返され、伊勢に路をおとりになつて都へとお急ぎ遊ばしたのである。尊のお崩れになつたところは伊勢の能煩野(三重縣鈴鹿郡にある廣大な野。能煩野陵は、現在、鈴鹿郡高津

り、説文に、脛氣臈と註せり、又今の世に油を造る具に、古比といふ木あり、その形中太くして兩端ややすぼりて細し、これ臈足の形に似たる故に古比といふにやあらん)今この王も山の神の毒氣にあたりまして、この疾を得たまへるにやあらん。古へのたぎはこの臈の狀に似てやありけん。なほよく考ふべし。」

伊故郷なる大和 父帝景行天皇は、大和國(奈良縣)纏向(現在の磯城郡纏向村にあたり)の日代宮においでになつたのである。尤も後には(尊の歿後十五年目)近江志賀の高穴穗宮に居られたが——。

伊たみごも 枕詞で、疊にする蘆を編むには、薦槌に絲を巻き、後先へ取交せて一筋づつ隔てて編むので。だてにかけ、又幾重も重ねてあむからへにもかける。

伊へぐりのやまの 平群の山。大和國生駒郡に、今平群村があるが、この附近の山をいつたのであらう。

伊くまがしがはを 「くまがし」の葉を。「くまがし」は「くろがし」(桐)の異名。桐は殼斗科。高さ四、五丈に達する。樹皮は帯緑黒色。葉は長橢圓形で鋸齒があり裏は灰白色である。材は器具用となる。「あらかし」「いぬかし」「かし」「しらかし」「ながかし」「ならばかし」「まるばかし」等の別名がある。

伊うすにさせそのこ 「うす」として挿せ、その「いのちのまたけん」子よ。「うす」は髻華と書き、上古、木の枝や草等をかざして髪飾としたもの。「その子」は命の全からん人——健康に生きのびて行く人々に對する親愛の意をこめていつたのである。この全歌の簡単な解釋は、本文にも續いて出てくる

が、なほ五十嵐力博士のも附け加へておかう。「我は
今病のために旅の空に寂しくはてるのであるが、そ
れにつけても故郷の汝等を思ふの情に堪へぬ。あは
れ故郷の命全く身の健ならん人よ、むかし我が汝等
とともに取つてかさして遊んだあの平群の山の隠白
櫛の葉を髪飾として楽しく遊べよかし。我が愛する
故郷人よ。」(作文三十三講)なほこの歌は「大和は
國のまほろば たなづく 青垣山 こもれる 大
和しうるはし。」(やはり尊の御作)などと共に日本
武尊の國思歌である。

垂命の全からん故郷人よ 古事記傳には「命の全く
てあらん人等はやまとの國に還りて——」と解して
ある。即ちこれによればこの故郷人は、故郷大和に
ある人々ではなく、尊とこゝまで行を共にして來た
故郷の人々の意にとらなければならぬが、どちら

にでもとれるから、暫く断定をさせておく。
垂隱白櫛 この字は古事記傳に用ひてある。筆者もそ
れを踏襲したのであらう。

垂薨去の後、大きな白鳥と化して云々「こゝに倭
に坐す后等また御子等、もろく下りきまして、御
陵を作りて、そのなづき田(御陵の周囲の田)に
はらび廻りて、哭かして、歌ひたまはく、「なづき
の 田の稻幹に 稻幹に 這ひもとほろふ ところ
づら。」こゝに八尋白智鳥に化りて、天に翔りて濱に
向きて飛びいましぬ。かれその後また御子等、その
小竹の刈杖にみ足きり破るれども、その痛きをも忘
れて、なくなく追ひいでましき。この時の御歌、「淺
小竹原腰なづむ 虚空は行かず 足よ行くな。」また
その海鹽に入りてなづみ行きましし時の御歌、「海處
行けば 腰なづむ 大河原の植草 うみがは いさ

よふ。」また飛びて、その磯にわたまへる時の御

歌、「濱へ千鳥 濱よは行かず 磯づたふ。」(略)か
れその國より飛び翔りいまして、河内國の志幾に留
まりましき。かれそこに御陵を作りて鎮まりいまさ
しめき。即ちその御陵を白鳥御陵とぞいふ。然れど
も亦そこより更に天翔りて飛びいましぬ。(古事記)
垂外に向つて 領土とか、經濟とかいふ方面に於て—

注意

古事記は勿論現代の歴史のやうに、考古學、地質學、古文書學、等々による研究などを綜合統一し、あくまでも科
學的な組織をもつて成立せしめられたものではない。従つて、そこには史實的、科學的、乃至は常識的な誤謬は頗る
多いかも知れない。しかし、そこが古事記の尊いところだ。といつても誤謬そのものが尊いのではない、それを超越
し無視して、古代人の内面的生活のすべてが、大膽にそこに投影されてゐるのが尊いのである。恐怖も、歡喜も、悲
哀も、迷信(今から見れば)もさながらにそこに展開されてゐるのが尊いのである。つまり古事記に表れてゐる世界
は、善かれ悪しかれ、儒教や佛教や乃至は歐米あたりの宗教や文明から未だ何等の影響支配を受けてゐない世界、即
ち我々日本人の「こゝろのふるさと」であり「こゝろの處女地」なのだ。さうだ、日本人の心が、生れたまゝのみづ

みづしい姿をさながらに現してゐるものは、一は詩歌に於ける萬葉であり、一は散文に於ける古事記であると断言しては、不可であらうか。もし古事記が、前記したやうな誤謬を恐れた結果、概念的な批判や、科學的な眞偽の飾などを通じて書かれたら、よもやこれほどまでに生き／＼と、匂やかに、古代人の息吹が我々に傳へられることはないだらう。で、さういふ古事記を一貫して、最も鮮明に表れてゐるのは、我が國古代人の精神の明るく、快活に、積極的であつたことである、そしてかゝる精神の所有者の代表的人物は、正に日本武尊といはなければならぬ。これについては五十嵐博士は次のやうにいつてゐる。「旅路に悩み、死に臨んで故郷をしのぶのは人情の自然で、珍しくもないが、毒氣に中り、恐しい苦悶を重ねて死ぬる間に、『遙かなる故郷人に語を寄す、命全けん人は平群の隠白嚮をかざし、陽氣に遊んで人生を樂しめかし。』といはれた御心持はどうであらう。この樂天的、積極的、向上的、光明的な勇ましい氣象はいかにも有難いものではないか。」と。女装して熊襲を討たれた尊、子供のやうに人を信じて——人にだまされて火攻にあつた尊、そして電光のやうな智慧を働かして直ちにその火を難返して敵を鏖にされた尊、また、熊襲討伐後、直ちに父帝から東征の命を授けられ給うた時は、「天皇はやく吾を死ねとやおもほすらいかゞなれか、西の方の悪人等を撃りに遣して返り参り上り來し間いく時もあらねば、軍人をも賜はずて、今更に東の方十二道の悪人等をことむけに遣すらん。これによりておもへば、なほ吾はやく死ねと思ほしめすなり。」とて叔母命の前に泣き伏された命、而も直ちにその涙を拂つて奮然として東に向はれた尊、そして最愛の后を犠牲にしても、國家の爲に盡された尊、それを概念的な愛國心から國のためだ、反つて名譽であるなどと仰せられずに、峠の上から遙かなる東

國の野をふりかへつて、「わが妻はや……」と打歎かれた尊、そして最後には死に臨みつゝ生の全きふるさと人の上に遙かに祝福を送り給うた尊——たゞごくごく大さつばにかう考へてみただけでもあまりに尊の魂の美しさに涙ぐまずにはゐられないのである。そして——その美しさを構成してゐる尊の御性格の天真爛漫さ純情無垢さはどうであらう。どこまでもどこまでも積極的に、明るく、ほがらかに生きぬいて行かう（勿論尊自身はこんなことを意識せられてはゐなかつたであらうが）とするその颯爽たる御性格はどうであらう。これが我が古代人の——我が日本民族の固有の精神性格だつたのである。「この有難い氣象、日本民族の積極的光明性が佛教などのお蔭で漏つぽく陰性化消極化せられたかと思ふと残念でならぬ。」と五十嵐氏はいつてゐるが、佛教や儒教が、我が國の文化や、忠君思想や、家族制度や、道德教育の上になした功績は甚大なものであつたとはいへ、この日本民族本來の性格を甚だしく畏縮せしめた責任の一部も亦これ等二教の負ふべきものであらう。本課を讀んだ我々は、正にこのやうな古代人の精神を復活する——精神的復古を成就するのが、正に新時代に生きるものの義務であることを切實に思ふのである。

一八 美しい心を保て

吉田絃二郎

解説篇

作者

吉田絃二郎。本名は源次郎、明治十九年佐賀縣に生れた。三十二年、長崎東山學院に入學、年餘にして退いたが、氏の後年の宗教的傾向はこのミツシヨンスクールで培はれた。三十八年早稻田大學英文科に入學した。在學中、一年志願兵として對馬要塞砲兵大隊に入り、見習士官になつた。四十五年卒業と同時に選信省囑託となり、一方、芝三田ユニテリアン協會に入つて「六合雜誌」を編輯した。その頃から大正初年にかけて、同誌に多くの創作、感想を發表したが、文壇への初舞臺は大正三年三月「早稻田文學」に發表した「磯ごよみ」であり、大正六年、對馬時代に材を得た「島の秋」を發表して以來、文名順に上り、作家としての位置が確立された。大正五年九月より昭和三年まで早大に教鞭を執つて、英文學を講じた。初めは小説及び感想文を以て多くの讀者に喜ばれたが、昭和期に入り、戯曲に力を注ぎ「大谷刑部」・「大阪城」・「二條城の清正」等を創り、好評を得た。著作は夥しい數に上るが、その大部分は「吉田絃二郎全集」全十八卷（新潮社刊）に收められてゐる。

教材

學校を卒業してやがて波荒い社會に向つて巢立たうとしてゐる生徒たち。彼等の前には彼等が豫想してもその深酷さをとても知ることはできない。社會の苦しいこと、つらいことは長上にきかされて、さぞ苦しからうつらからうとは思つてゐても、そこは若いものである、自分の意志、希望といふものの力に壓倒されてしまふ。しかし、一步社會に出てみると、あまりに變化にとみ、あまりに深刻であるために、美しい幻影は一瞬にしてこわされる危険に遭遇する。なるほど、社會は學校より苦しいところであり、また學校ほどに理想がおこなはれにくいところである。しかし社會の進歩はゆつくりしてをり、醜いものにみちてはゐるけれども、徐々に理想に力によつてなされつゝある。このところを、よくのみこまなければならぬ。自己の世の中を知らずに組立てた希望や理想が、すぐそのまゝ行はれないからといつて、やけになつたり或は自ら進んで世のみにくいものなかにいつていつたのでは、社會の進歩はますますおくれしてしまふ。大變よわいかすかな一個の力にすぎないけれども、しかし、あくまで理想を守り、世馴れた人はどうあらうとも、理想の行はれることをあくまで信じてゆくといふところに人間の人間としての價値がある。本課はその意味でやがて世に立たうとする生徒らに絶好の教材であると信ずる。

指導篇

扱方

本課は議論文とはいへないが、しかし哲學的な内容をもつてゐる課である。單純な考へ方では理解のできないところ
美しい心を保て

ろがあると思ふ。簡単な目的論や悪人の存在もまた許すべきものであるといふやうな、まちがった考へを結論しやすい箇所もある。さうした結論でなしに、作者の意味するとほりの理解を得るためには、教授者の慎重な注意を必要とする。従つて解釋の項も單語に重點を置かず、句又は文章の理解に資する點に力をいれておいた。御参考になり得れば幸甚である。

展 開

第一節——單純から複雑へ（から）世俗の生活は散文である。（まで）

學校における生活と社會における生活との相違の特徴づけ。作者は學校を單純・無自覺・他力と特徴づけ、社會を複雑・自覺・自力を定義し、これをわかりやすく詩と散文にたとへた。

第二節——しかし、學園の生活は、要するに（から）その散文的世界に於てである。（まで）

學校は美しい。美しいが、しかし、人生の眞の美しさは、實は、散文的な世界である社會生活にある。

第三節——或西洋の作家は（から）作者の魂が浸され切つた後でなければならぬ。（まで）

しかし、人生の味はひは複雑・微妙であつて容易にわからぬものである。

第四節——世の中は複雑である（から）悪く生きるかの二つの途が別れる。（まで）

本課のヤマである。自己の美しい幻影がやぶられたとき二つの生き方がある。

第五節——いつまでも子供の心を失はない（から）醜い影に襲はれつゝあるからである。（まで）

いつまでも子供の心を失つてはならぬ。童心を輕蔑するといふことは、それだけ世の中の醜さに壓倒された證據である。

第六節——人を疑つてはならぬ（から）心が曇る時に眼も曇る。（まで）

いつまでも童心を、美しい心を失つてはならぬ。

解 釋

※單純から複雑へ 簡単な生活から複雑な生活へは

ゝるといふ意味である。

※無自覺から自覺へ 無自覺な生活から自覺の生活

への意味である。學校における間は、父母に生活の

安定を得させてもらひ、學校にゆけば先生から學問

訓育にわたつて指圖をしてもらふ。ぼんやりしてゐ

ても、長上の教へるとほりにやつてゐれば、それで

よいのである。しかし世の中へ出るとさうはいか

ぬ。自己の行爲は自己がその行爲の影響、結果、善

悪を考へて行はねばならぬ。

美しい心を保て

※他力から自力へ 他力の生活から自力の生活への

意味である。父母先生の教へにたよつてゐればよか

つたのに反し、これからは自分の力でやつて行かぬ

ばならぬといふことである。

※經驗を意識する 經驗とは單に物事を行ふことに

すぎない。その事を行つてもそのことを考へるのと

はちがふ。幼兒の頃から乳を吸ひ食物を食つても、

それが生命體の維持の上に必要であるとか、或は咀

嚼作用が行はれるとかいふことについては全く考へ

てゐない。このやうに、自分が經驗したことを頭の

知的作用によつて反省することをいふ。

※理想的 理想は人間が最も正しい美しいと考へることである。したがつて、理想的とは、自分の（或は一國の）最も正しい美しいと考へたのに近い、といふ意。

※清貧 貧しいといふことをほめていふ。醜い或は陋劣な行によつて富み榮えるのに反して、貧乏ではあるが、一生のうちに清い行をしてゐるといふ誇りをこめてゐる言葉である。

※殉教 いかなる抑壓迫害をうけても自己の信仰する宗教のためにその生命を犠牲にすることである。

※ユートピア Utopia. 理想郷。

※凝滞 とどこほつて通じないこと。

※七つの星の云々 さうした不可能なことと分りきつてゐることが、たとひそれができても、これはで

きないといふ強勢のための修飾節。

※不可測 漢文を訓讀するやうによめば、測るべからずで、即ち測ることのできない。

※近松の傑作 近松は江戸時代初期の劇作家近松門左衛門である。姓は杉森、名は信盛、通稱平馬、後自ら近松門左衛門と稱した。巢林子、平安堂、不移山人等の號がある。長州萩の人といふが、京都の人といふ説が有力である。若い頃寺に入り還俗して一條家に仕へ、職を辭して坂田藤十郎等のために歌舞伎狂言、宇治加賀掾や井上播磨のために淨瑠璃正本を書き、竹本義太夫初世及び二世のために人形淨瑠璃正本を作り、時代物世話物を通じて名作多く、文章は華麗巧緻。俳句の芭蕉、小説の西鶴と並んで元祿の三大文豪と呼ばれる。享保九年、大阪で歿、年七十二。かれの傑作は世話物に多く、「曾根崎心中」「女

殺油地獄」「心中天の網島」「博多小女郎浪枕」「冥途の飛脚」「槍権三重帷子」等であり、時代物には

「國姓爺合戦」が有名である。

注意

本課第四節に、「(人生の)中には汚れたものもある。醜いものもある。詛はしいものあさましいものもある。同時に、世の中でなければ見出せない聖いもの尊いもの美しいものもある。世の中へはいつてゆく時、人は始めて美のいかに美しく、人の心のいかに尊いものであるかを實感する。」とある。ふかく考へずに讀むと、世の中に醜いもの、汚れたものがあるから、美しいもの清いものがあるといふ風に結論しやすい。たしかに美醜清濁は相對的なものであつて、絕對的なものではない。醜を知らずに美をいふことも感ずることもできない。しかし、決して人生に於ては醜あるが故にの美でもなく、濁あるが故にの清でもない。人生の本來の姿は美しくかつ清いものであるはずである。醜いもの汚れたものがあるのは、それはまだ人類社會が十分に進歩しきつてをらぬからである。だから自己を社會の汚濁に染めないといふことは、そのことだけでも社會に人類につくしてゐることなのである。生徒によく徹底せしめたいことである。

插
畫
解
說

附
筆
者
略
歷

北畠親房 (口繪)

染谷波光筆

本圖は昭和八年秋の日本美術協會第九十二回展覽會に出品された日本畫である。本文第十四課に關聯して授けるべき教材で、北畠親房が兵馬控徳の間、戰塵のうちに神皇正統記を綴つてゐる様を描いてある。畫面の大き二尺に五尺絹地に極彩色密畫された大和畫である。

【略歴】

筆者は本名は高之助。大正三年六月二十一日、千葉縣東葛飾郡法典村に生れた。中學三年の時、磯田長秋の門に入り、昭和八年九月師より波光の號を受く。畫壇に於ける經歷は餘りないが、將來を囑望されてゐる新進である。

柿本人麿 (四四頁)

土佐光起筆

人麿の像は名家の筆で描き残されたものが現在相當傳つて居りますが、皆一致した圖であるところから見まして根據なく描かれたものでない事は確かであります。本圖は歌仙の圖を得意として、そうした圖を澤山残した光起の筆で

北畠親房・柿本人麿

ありまして、絹本尺五巾タテ三尺五寸のもので著彩のものを下方の像の部分だけ掲げたものであります。尙本圖は光起として精心こめた作品である事は上方に有栖川幸仁親王の御筆にて

ほの／＼とあかしの浦のあさ霧に新滿かくれゆく舟をしそ思ふ

といふ賛が書かれてあるに依つて見ても明らかであります。

【略歴】

筆者は土佐宗家の畫人光則の男で、土佐三筆（光長、光信及び光起）の一人である。畫所預となり従五位下左近將監に任ぜられた。初め年二十二にして父を失ふ。この時適く泉州堺に居り、祖父光吉の門人某に就いて畫法を受けてゐた。先世の名畫を追慕し、兼ねて和漢諸名家の奥儀を親ひ勉強琢磨遂ひに妙手となる。後、薙髮して法眼に叙せられ常昭と號す。元祿四年九月二十五日歿す。京都洛東百萬遍に葬る、年七十五。遺蹟著名の作品は三十六歌仙額、新圖百鬼夜行、酒頭童子卷物、黄帝三幅、田村廣延銀行敷居士、鶉の圖、花鳥の圖、一本松、及び一本櫻等である。

山部 赤人

（四五頁）

藤原 信實筆

筆者信實は初め隆實と云ひ、累進して右京權太夫となつた。和歌にも巧だつたが、畫道は父隆信について學び、土佐派の三筆と稱せられた一人の光長の畫風に私淑して、その筆意を學んだ。特に人物を得意とし、その人麿の像は人

人の推賞おかさるものである。晩年には入道して寂西といつた。彼の作品には高潔なる性情と文人の詩趣溢れ、且つ自由流暢な運筆は、さすがに一世に宗たるべきものがある。世に有名なる繪師の草紙といふ繪卷を見ても、その圖は飛躍し且つ情趣深く光長に較べていづれとも優劣を論じ難い。文永二年十月十六日薨。年八十九。その著名な作品は、榮華物語、歌仙殘缺、三十六歌仙卷物、歌仙人物人ヶ疊殘缺、建保中殿御會圖、人麿色紙竝手持料紙、普賢十羅刹女、住吉玉島神影、天滿宮御影、定家卿肖像、大黒天、北野天神緣起等である。

棟 木

（五〇―五一頁）

尾竹 竹坡筆

本圖は明治四十三年の文展四回に二等賞を得た「おとづれ」と共に出品された姉妹作で、藤原極盛期佛寺の造營に棟木を運ぶ有様を題したものである。六曲屏風一双に水墨のみにて描き、わづかに淡彩をほどこした雅致の高い作である。

【略歴】

筆者は名は染吉。明治十一年新潟市片原町に生まれた。人物畫を小堀鞆音に、山水を川端玉章に、花鳥を梶田半古に學び、前期の日本美術院、パリ―世界大博覽會、聖路易萬國博覽會、東京勸業博覽會、巽畫會等に出品して屢々受

賞した。また巽畫會評議員となり、文展へは第一回に「羅喉羅」、第三回に「茸狩」を出して三等賞を得、第四回に「おとづれ」「棟木」、第五回に「水」「秋草」「梧桐」、第六回に「にはかあめ」「天孫降臨」「春秋」、第八回に「うらゝか」、第九回に「豪華」、第十回に「ゆたかなる國土」、第十一回に「みそのゝ秋」を出し、褒状及び三等賞を得た。兄に尾竹越堂があり、弟に尾竹國観がある。

望の月 (一枚刷)(五八・五九頁)

吉村忠夫筆

本圖は昭和二年帝展第八回に出品して、特選の榮を得た日本畫である。竹取物語中、かぐや姫の昇天を題材とし、新興大和繪による配色の美麗絢爛を極めた名作である。

【略歴】

筆者は明治三十一年福岡縣に生れた。大正八年東京美術學校日本畫科を卒業して後は、松岡映丘氏に就いて銳意大和繪の研究に精進してゐる。昭和三年には帝展の推薦となつた。

香爐峯の雪 (七二頁)

上村松園筆

本圖は大正九年の作品であつて、同年の華陽閣展に出品されたものである。畫面は二尺巾の五尺大、絹本極彩色の密畫、畫題は説明までもないものと思ふから省略する。

【略歴】

筆者は関秀日本畫家。文展推薦。本名は常子。明治十二年四月京都に生れた。初め畫を鈴木松年、幸野樸嶺に學び間もなく竹内栖鳳の門に移つた。明治三十三年第九回繪畫共進會に「花さかり」を出して以來名を中央に知られ、文展以前のものには「朝顔の花を持つ少女」(美術協會出品)、「重衡」(日本畫會出品)、「輕女惜別圖」(同)、「時雨」(美術院出品)、「蟲の音」(美術協會出品)等があり、文展へは第一回に「長夜」、第二回に「月かけ」、第四回に「上苑賞秋」、第七回に「螢」、(以上各三等賞)、第八回に「舞したく」、第九回に「花かたみ」(以上各貳等賞)、第十回には「月蝕の宵」を出し、推薦となつた。實子に現代關西畫壇の若手として名をなしてゐる上村松篁がある。

昭和十四年六月三十日發行

國語科教授の實際

—帝國實業讀本提要卷十一—

編輯者

富山房編輯部

發行所

富山房
東京市神田區神保町一丁目三番地

代表者

坂本守正

印刷所

合資會社 秀英社
東京市神田區小川町二丁目十二番地

發行所

合資會社 富山房
東京市神田區神保町一丁目三番地

電話神田自二一七一—至二一七八番

395
175

